ジャンキー探偵！

**狛街都心**

I think he’s in some kind of pain.

I think it’s a pain cry. and I said: pain cry?

then language is a virus. language! it’s a virus!

LAURIE ANDERSON - LANGUAGE IS A VIRUS

　ジョージ・レストレイドは、遺体を前にして溜息を吐いた。溜息は宵闇の濃霧に紛れた。

　彼個人として特定の信仰は持たないが、形だけでも十字を切った。神の加護からは縁遠いこの掃き溜めで、いかほどの効果が期待できるかは定かではなかったが、せめてもの気休めである。こんな場末の娼婦でも、浮かばれることを祈った。

　イーストエンド・ホワイトチャペル地区、バーナーストリート。大帝都ロンドンにおよそ相応しくない貧民窟の一角で、

四十四歳の淫売婦、エリザベス・ストライド―通称ロング・リズは喉を切られて絶命していた。目撃という邪魔が入ったおかげで、少しの服の乱れで済んでいるところが不幸中の幸いであった。

　澱んだ雨に混じる彼女の血液は、未だ喉元から垂れ続けている。羽虫が群がる傷口から、レストレイドは思わず眼をそらす。しかし、他の三件に比べたら、ずっと慈悲のある状態だった。

「レストレイド警部」

　声のした方を振り返る。ウェスト巡査部長だった。まだ若く、加えて下戸だが、見込みのある青年だ。小雨だったが、彼の制服は多汗もあってかびっしょりと濡れていた。それは彼、ひいては全員の気苦労を象徴しているかのようだった。

「ウェスト君か。御苦労、どうだね、目撃証言は取れたのか？」

「ええ、近くの酒場でこの時間まで粘っていた男から」

「何だって？」

「身長はあまり。黒っぽいフェルト帽を被り、コートを羽織っていたと。まだ彼の証言した犯行時刻から半刻と経っていません。早急に犬は走らせましたが―」

　レストレイドは、返事とも相槌とも取れぬきを漏らした。大量に返り血を浴びているはずの前回、前々回において、犯人の口髭一本もくわえて来なかったのだ。今回も望みは薄いか、とまで言葉を継ぐつもりはなかった。

　気まずい沈黙をウェストが埋めようとする。

「前の二件と共通するのは、イーストエンド内である点、鋭利な刃物で喉を切られている点です。一見したところ、他に目立った外傷はありませんね」

「……よし、検死に回そう。お前はもう少し証言を洗うんだ」

「了解」

　立ち去るウェストの背中を眼で追いながら、レストレイドは帽子を取り、禿げてきた後頭部をいささか掻いた。以前からの悪い癖だ。しかし、これが本当に少し過去の話であったなら、現場は若いのに任せて、今すぐにでも馬車をベイカー・ストリートに走らせるというのに。今はそれが叶わないということを如実に想い出し、レストレイドは強く歯噛みした。

　大量の警官でごった返している現場は、深夜だというのにしかった。何事かとアパートの窓から顔を出す者がいたかと思えば、ひとときの安眠を妨害する我々に階上から汚物を放り投げてきた。連日の報道に眼を通してきたレストレイドにとって、その行為に対して怒りよりも謝罪の気持ちのほうが勝っていた。それは他の警官も同じだった。

　初動捜査は上手く行っているはずだ。それが何故、我々はここまで敗戦色を帯びなければならないのか。

　ぼうっとしていた彼のすぐ横に、早馬が乗り付けた。あまりの臭気に、馬が鳴いて文句を垂れる。

　中から飛び出してきた警官が、血相を変えて彼を呼んだ。

「レストレイド警部！　今度はマイター・スクエアで、また娼婦の死体が！」

「な、何だと!?　向かおう！」

　レストレイドは馬車に乗り込み、道中で事件の概要を聞く。顔に切り傷、腹部を切開、内蔵、恐らく子宮を切除……おどろおどろしい文言に御者が肩を震わせた。

　まさか、一晩で二人も殺されるとは―いや、どこかで予期していたきらいはあった。ヤツならやりかねない、と。

　―新聞社にふざけた手紙を送りつけ、月明かりに反射する銀のナイフをかざし、今夜もどこかで高らかにっている。

　そう思うと、レストレイドは怒りで全身が震えてならなかった。

「切り裂きジャックめ……」

　数日後。激務の合間を縫って、レストレイドは郊外の霊園に出向いた。一八八八年十月初旬。稲光でも落ちてきそうな、どんより曇った初秋の時分であった。暇そうに新聞を眺めていた墓守から花を買い、中に入る。彼もまた、切り裂きジャックの記事に釘付けであった。

　切り裂きジャック―ジャック・ザ・リッパーが初めて現れたのは、今年の八月末日午前三時のことである。イーストエンド・バックス・ロウ地区での娼婦メアリ・アン・ニコルズの殺害からだ。喉は裂かれ、腹部は切開されて体外に腸が飛び出し、性器にまで傷跡が付いていた。警察は躍起になって事実関係を洗ったが、物取りも怨恨の線も消えた。つまりは、まったき異常犯罪であり、その一件だけでも付近の住民を震撼させるには事足りた。

　しかしながら、事件は続いた。

　九月八日、アニー・チャップマン殺害。連続性もさることながら、壮絶な現場の状況が、恐怖心をより強く煽り立てた。

　やはり喉を切り裂かれ、腸が肩まで引きずり出されていた。加えて、子宮と性器、膀胱まで切り取られていた。だが、陵辱の跡はなかった。前回の件もあわせて、性犯罪と言えるかは難しいところであった。

　この頃になると世間も注目し始める。何やら恐ろしい殺人鬼がロンドンのスラム街をうろつき回っているらしい。市民に不安の種と格好の話題を提供してしまった警察は、ようやっと本腰を入れて事件を追いかけることにした。

　特に検視官は、アニー・チャップマン殺害に際して、犯人が子宮を持ち出している点に着目した。凡夫であれば、刃物一本で正確に腹部を切開すること自体不可能であるし、切り裂いたところで子宮の位置はわからない。医師か、医学生か、何にせよの人物であることは間違いないという見解が主であった。

　ここ数ヶ月の間の似たような殺人事件をまとめ上げると、前述した二件を合わせて九件ほど起きている。しかし、昨夜ほぼ同時刻に起きた直近の二件とメアリ・アン・ニコルズ、及びアニー・チャップマン殺害の四件を合わせて切り裂きジャックの犯行とする意見が根強い。娼婦、喉を裂かれて絶命、イーストエンドでの犯行、これらのファクターでくくるとまずこの四人が浮かんでくるからである―

　レストレイドは旧友の墓前で足を止め、「偉大なる……」から始まる墓碑を読んだ。刻まれているのは紋切型の常套句だが、ここに連なる墓の中でも唯一、それに十二分に相応しい功績を残した男が眠っていた。彼は時代の寵児、まさしく天才であった。彼との些細な対立や不審感も、今となっては温かみのある思い出に美化されている。

　レストレイドは、彼が生前愛していたクレーパイプで煙草を呑んだ。深みと苦みの混じる奥深い味わいも、今ではいたずらに郷愁を誘うばかりだった。腹立たしいほどに警察を出し抜き、見るも鮮やかに犯人を追い詰め、常に法と正義とロンドン市民のためにその身を粉にして働いた、名探偵シャーロック・ホームズの墓を前にして、煙をゆっくりと吐いた。

　生前は、没したら海に骨を撒いてくれと公言していたホームズだが、いま彼の骨は滝壺に散らばっている。せめて、河を下り、大海へ流れ出ていることを祈ろう。

「いらしてたんですか」

　回想の中にいたレストレイドは、な傘を携えてやってきた婦人に気付かなかった。

「ハドスン夫人……ええ。葬式も出られなかったものですから」

「まあ、そんなこと。気にもとめませんわ、あの変人なら」

　そうくすくす笑うも、どこか寂しげに映る。

　ハドスン夫人は、ベイカー・ストリートにあるホームズの下宿の管理人で、現在はホームズの旧い友人などを招き、名探偵の遺産を整理しているという。いつも愛嬌のある笑顔を絶やさず、太い胴回りをゆさゆさと揺らして、吸血鬼の生活を送る奇人の世話をしていた彼女が、葬式では人目もはばからず号泣したそうだ。レストレイドはその話を又聞きしただけで目頭が熱くなった。

「お仕事のほうは？　今日は非番でしょうか？」

「いえ、失礼ながらこのままとんぼ返りしようかと。目下、課題が山積みでして」

「そうですか。どうか、お身体に気を付けて」

「ありがとうございます。留意します」

　ハドスン夫人は少しためらってから墓に手を当て、やはり切り裂きジャックの話題に触れる。

「ホームズさんが生きていたら、きっと今頃お縄に付いていますでしょうね」

「そしたら貴方も仕事にかまけず葬式にだって参列できましたのに」とでも言われるかと、一瞬だけ身構えてしまったレストレイドは、「それでは因果関係が破綻するでしょう」と胸中で無意味に反論、いや、弁解をする。

「ええ。間違いなく、朝飯前でしょうな。相手がどんな卑劣漢であろうとも、得意のバリツで―」

　数ヶ月前。

　あのホームズをして犯罪界のナポレオンと言わしめた長年の宿敵、ジェームズ・モリアーティ教授と、スイスはライヘンバッハの滝で一騎打ちになり、ふたりとも滝壺に落ちた。必死の捜索の甲斐も虚しく、ふたりの水死体は上がらず、稀代の名探偵は行方不明者として長らくリストに載っていたが、然るべき期限が来た後、遺骨のない葬儀をしめやかに執り行った。英雄シャーロック・ホームズ最後の事件としては、あまりに悲痛すぎる顛末だった。

　あの後、彼の物語を最も身近で聴き、綴り、世間に送り出していた伝記作家で医者のジョン・ワトスン氏も、妻を亡くしてベイカー街から姿を消した。役目を終えた登場人物の退場という、ドラマにしても出来過ぎている隠遁。その心中を察する。

　―あのゴミか宝かもわからない物で溢れ返った２２１Ｂの下宿に、何人もの大の大人が集まって、泣いて懇願する依頼人に朝食のメニューと靴のサイズを尋ねる彼の後ろ姿を、永遠に見ることができないとは―

　いまはただ、あの日々がひたすらに懐かしかった。

「……失礼。ハドスン夫人、私はこれで」

　気まずくなる一方の場から一刻も早く抜けだそうと、一礼して歩き始めようとしたレストレイドを、夫人が引き止めた。

「すみません。大変申しあげにくいのですが、遺品整理を手伝って頂けませんでしょうか？」

「―それはご婦人にすべて任せるのはあまりに無慈悲でしょうから、いずれ手伝いに参ろうかと思っていましたが、生憎ですが御存知の通り、立て込んでましてな」

「いえいえ、何も家具や調度品を現職の警官の方に引き取って欲しいというのではありませんわ。そういったものは粗方、業者に頼んでやらせましたし、先日もホームズさんの旧い友人がいらっしゃいまして、お手伝いをしていただきました。問題はホームズさんが、生前集めていた資料やメモといった類のものでして……」

　みなまで言わずともレストレイドにはわかった。ありとあらゆる学問に精通し、何よりも警察以上に警察の真似が出来る男だったのだ。古今東西の犯罪にまつわる膨大なファイルが、薄暗い下宿にはまだまだたんと眠っていることだろう。懇意にしていた警官という正義の光のもとへ、ホームズの形見は渡るべきだと夫人は考えた。

　それなら協力しない手はない。どうせ、次はいつベイカーに寄れるかわかったものではないし、そう何度も足を運びたくなる場所ではなくなってしまったのだから。

「わかりました。向かいましょう」

　レストレイドは馬車に乗り、懐かしのベイカー・ストリートに着いた。下宿に入ると、あまりにも濃厚なノスタルジアに気圧されてしまった。失礼を承知でハドスン夫人に席を外してもらう。すでに泪は枯れたと思っていたが、頬を伝わるものがあった。それを指先で拭い、散らかった室内を更に散らかす。

　パヴァリア啓明結社、カルボナリ、ヴードゥー……早速怪しげな古書が発掘出来た。科学捜査が魔術に光を当てる現代で、こんな抹香臭い書物を当たったところで進展はないだろう。装丁も立派なものばかりで、その道の者に譲れば、家具のひとつやふたつ買い換えることも可能だ―と邪念が混じったが、レストレイドはそれを振り払った。

　陽の当たらないホームズの下宿は、ありとあらゆるもので溢れかえっていた。あの頃は来る度に「少しは整理をしろ」といった意味の小言を的に漏らしたものだ。ちょうどいい具合にカオスな室内が、ホームズという天才の数少ない人間味を表しているかのようで、そこに立っているだけでレストレイドは記憶に足を取られそうになった。

　しばらく調べ、未解決事件のファイル群とそれにまつわる周辺の資料をいくつか拾い上げた。それだけでもたいそうな量になってしまったので、紐か鞄でもいただけないかとハドスン夫人を呼びに部屋を出ようとした瞬間、背後に刺すような視線を感じた。

　レストレイドが長年培ってきた刑事の直感だった。ジトッとした脂汗が額に浮かび、彼は腰のホルスターに手を掛ける。呼吸を整え、ピストルを引き抜き、振り向いた。

「動くな！」

　レストレイドの一声に男は素っ頓狂な声を上げて、二歩、後退った。

「ま、待った。待ってくれ。撃つんじゃない……」

「手を上げろ！　上げるんだ！」

　鬼の形相でをホールドアップし、青褪めた顔の男をかせる。

　男は、仕立屋でつい五分前におろしてきたかのようなパリっとした鼠色の背広を羽織り、型の崩れ気味な洒落たフェルトハットを被っていた。深みがかったふたつの黒い眼球が、えてキョロキョロと忙しなく動いている。年の割には痩せ過ぎているが、一目見てわかる典型的なアメリカの白人だった。そいつは、早口でまくし立てる。

「ちょっとヤリすぎて、トビが去るまで三日ほどベッドの下に隠れたんだ、そこのサイドテーブルに溜まっていたコカに、ラム酒を多めに混ぜてみたんだがね。最初はすこぶる良かったんだが、効き過ぎたみたいで……そんな時に、ああ、ポリスか？　アンタがこの部屋に入ってきたもんだから、出るに出れなくて……そう、腹が空いたよ。床の埃以外三日間飲まず食わずだ。ピザはないか？　オリーブは抜きで……」

　神経質なのか、衰弱しているか、妙な痙攣を起こしながらアメリカ人は早口でまくし立てた。怪しさを通り越して恐怖すら感じさせる挙動だ。話している内容も、理知的な言葉遣いの割には随分とけったいなものである。

「今回は幻聴が無かった……の類は見られなかったな、血圧の上昇と、そう、気分の高揚が主だ。それもそうだ、クラックを飲んだ時に近いかもしれん。分量を間違えなければ、晩酌にだって勧められるね、ポリスのおじさん……」

「お前は誰だ、名乗れ」

　おお、止めろ、撃つな……と男は呻いた。

「俺か、俺はビル。ビル・バロウズ……本名のほうがいいか？　ウィリアム・シュワード・バロウズ・ジュニアだ。小説を、一応……書いている。親友にはリー、もしくはゴーストと呼ばせてるんだ。勿論、ここの主人も便箋にはそう書いていた」

　そういって血反吐でも吐くかと思われるように、二三咳を吐いた。死がまとわりついたような絶望的な咳だった。ただでさえ皺の寄った紙を引きちぎるような特徴的な声をしているので、更に歳の見当がつかなくなった。

「ホームズの、友人か？」

　いくらホームズ自身が奇人とはいえ、このさながら持ちの男との節点は見当たらなかった。

「ああ、知ってるとも。面白いヤツだった……懐かしいな。俺が南米原産の幻覚性サボテンを、ヤツに安く売ったとき……ガキみたいに喜んでいたのが、ついこの間みたいだ。あの時は俺も金がなかったから、ヤツに救われた形だな」

「何故、ここに？　不審者紛いじゃないか」というより不審者だ。

「なあ、いくらでも喋るよ。気分は良くないが、最悪でもない。まずは、下ろそうじゃないか。ピストルを……遊びは嫌いじゃないがね」

　レストレイドは、一度ためらってから、ピストルをホルスターに仕舞った。

　リーと名乗る小説家のアメリカ人は、米国のミズーリ州出身、四十五歳。ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジという土地に、友人が多くいる―らしい。

　各国を転々としながら、甲虫のような形状のタイプライターを用いて小説を書き、その印税と親からの仕送りで生活している。自他共に認めるくだらない脛齧りだというが、個性的な喋り方と仕草には、慣れてしまえば、どこか惹きつけられるものがあった。

　長らくモロッコのタンジールという土地で合成薬物の売買や、害虫駆除業などをして暮らしていたらしいが、去年の暮れあたりにホームズから急を要する電報を貰い、それを機に英国にやって来たという。だが、電報を受けたはいいものの、渡英するだけの旅費が用意できず、友人や親類からせびって、先週の始めになってやっと友との約束を果たせたらしい。途中、何度かそのことすら忘れていて、借りた金が丸々ドラッグの買い足し費用に飛んだこともあったという。

「いや、驚いたよ……まさか、あのホームズが死んだなんて……頭の使いすぎか、もしくは肺でも病んだのかと思ったら、滝から落ちたなんてな……イギリスにはそんなに危険な名勝があるのか？」

　先程の古書の山に腰掛け、虚空を見つめながらリーは話す。勝手気ままでありながら、妙に機械的な語り方をする男だ。自分の履物に付いたゴミを凝視しながら、リーは続ける。気付かれぬようレストレイドが立ち去っても、三日ほどは止まらず喋り続けそうな気配すらある。

「落ちたのはスイスの滝だ」レストレイドが訂正する。

「あいつはスイス人だったのか？　まあ、いいさ……とにかくこの街は臭いな。来て早々、人糞を踏みそうになるなんて、メキシコでもなかなかないぞ……」

　レストレイドは植民地であった米国民からの辛い評価を受けて、心中穏やかではなかった。外面通り、保守的な人間なのだ。

「悪かったな、不衛生で」

「構わないさ、どうせ外国人は困らない。自国民よりは……」

　返事のしようがない返事をしてリーはに火を点けた。深く吸い込み、眼を白黒させて首を回した。それにも何か混ぜているのだろうか。

「しかし、ホームズは、リー。何故君を呼んだ」

「切り裂きジャック事件を……ヤツから、ホームズから頼まれた」

「何だって？　では、あなたも探偵業を？」

「日銭を稼ぐためにしていたこともあったが、本職を前に胸は張れんよ」

　何が飛び出てこようと君に感心することはないだろうと、レストレイドは告げようとしたが止める。

　室内に立ち込める紫煙で、リーの顔が時折ぼやける。やけに煙の濃い煙草だ。リーは空いている手の方で背広の内ポケットをまさぐり、汚れた電報を差し出した。レストレイドが眼を通す。走り書きであったが、筆跡は間違いなくホームズのものだった。リーことウィリアム・バロウズを捜査に加えることを、強く進言している。

「確かにホームズのものだ」

「あいつは、嘘は吐かない……多くを語らないので、周りが混乱していたがね……」

　リーはなかなか知った風な口を叩くものだが、実際ホームズはそういう節がある男だったのは間違いない。そろそろ友人であるのは認めてやるべきだ、とレストレイドは折れた。

　レストレイドは思わず溜息を吐く。切り裂きジャックに関して猫の手も借りたいほどに忙殺されている最中、あのホームズが見兼ねて天国から遣いを寄越してくれたのだ。感涙にむせび泣き、ますますこの下宿と彼の墓には足を向けて寝られなくなったわけだが、それがどうしてこんないでなければならなかったのか。他にも幾千と有識者や知識人の知人はいただろうに。

　リーはレストレイドの顔を伺いながら、もう一度「飯が要る……」と深刻そうな声音で呟いた。事実、深刻なのだろうが。

　こうなったらだ。どちらにせよ、ここ数日とて相変わらず逮捕に繋がる有力な情報は上がっていない。ホームズの手紙が本物なら、この男は最初で最後の遺言になる。本当に猫の手を借りた心持ちで、この男を相棒に侍らせてみても悪くはないか―流石に、書類をくわえて立っているくらいのことは出来そうだ。

　レストレイドは腹を決めた。眼には眼を。には、だ。

「わかった。リー、宜しく頼む」

「ああ、宜しく……」

　それで、アンタ、何て名だ？　とリーが問い、レストレイドは名乗ったが、ホームズからそのような名を聴いたことは一度もないという。

　レストレイドはリーの記憶力のせいにするか、さもなくば聴かなかったことにした。

　ながらハドスン夫人に簡単な軽食を出してもらい、自称小説家兼侵入者は人心地つけることとなった。音を立ててサンドイッチにがっつきながら資料に眼を通すリーと、紅茶を啜って煙草を噛み、同じく資料を読み返すレストレイド。形だけなら簡易捜査本部だ。

　ハドスン夫人は、リーを招き入れたところまでは憶えているが、てっきり途中で帰ったものと思い、着の身着のままのリーを見て驚愕を超え身がんでいた。それでも長年奇人に慣れ親しんでいる女傑は、リーの挙手を見越して五枚目のパンを差し出す。リーが紳士なのは、恰好だけだ。何の副作用かは知らないが、思春期の少年ほどによく食べている。

「切り裂きジャックのものと推定されている事件で最も古いものは、ること去年の十二月下旬……腹部を杭で突かれた女性、フェアリー・フェイの事件に至るという説もある……か」

　リーがパンを咀嚼しながら資料を音読する。資料を閉じ、レストレイドの方を見て、言葉を紡ぐ。

「まだ当時は生きていたホームズが……海軍の機密文書を巡る事件を追いかける傍ら、いつも通り奇怪な事件に関するアンテナを張り巡らせていたんだ。切り裂きジャックにまつわる何らかの糸口を掴んでいても不思議ではない……」

「まあ、そういうことだな。ホームズの眼には、充分に引っ掛かる珍事だったろう」

「杭というのがまた冒涜的だ。見立てるにしても悪趣味だね……」

　時折、思い出したように知性のかけらを投げつけてくるのが、この男の癖らしい。

「何にせよ、ヤードはその事件を切り裂きジャックのものだとは断定していない」

「何故だ……？」

「『イーストエンド近辺で、娼婦が喉を裂かれて殺される事件』という線で絞ると、浮かんでくるのは四件だ。それと、二十七日付でこんな手紙が、セントラル・ニューズ・エージェンシー社に送りつけられた、リー、知っているかね？」

「ディアー・ボスの手紙か……それなら俺も読んださ」

　胸糞悪い文章だった。初見時、レストレイドはあまりの怒りで、ろくに眼を通していないその日の朝刊を破り捨ててしまった。

　親愛なる編集長殿―から始まる切り裂きジャックからの手紙は、間抜けな警察を愚弄する文章から入り、自身が売春婦に怨恨を持っていることを明かし、巷間に流布している自分の呼び名を、「切り裂きジャック」というもので統一するよう呼び掛ける。そして何より、「次の仕事ではレディの耳を切り取ってやる……」などという凄惨な犯行予告で締めくくられていた。

　事実、その直後に殺害されたキャサリン・エドウズは耳を傷つけられており、この手紙の信憑性は一気に増すことになる。世間は切り裂きジャックという名を認知することになり、同時に「私が切り裂きジャックだ」というふざけた電話がヤードに度々寄せられることとなった。

　誉れ高きの臣民が、聞いて呆れる愚行である。

　十二分にサンドイッチを堪能したリーが、腹をさすりながら灰皿を手許に寄せる。さっきの紙巻煙草をもう一本取り出し、火を点けた。赤く燃える小さな火が、徹夜明けのレストレイドにはダブって見えた。この件が済んだら、少し休む必要がある。

「それで、こっちが三十日の事件を予告した、切り裂きジャックからの第二の手紙……を載せた記事だ。消印は十月」

　記事を手渡し、リーが声に出して読む。

「明日になればこの小粋なジャック様の仕事ぶりにお目にかかれることだろう……今度はだ……か。高慢ちきな野郎だな」

　皿を片付けていたハドスン夫人が咳払いをした。ついでに、彼女は気付いたことを口にした。

「ですが、消印が朔日でしたら、三十日の事件を知ってから書くことも可能ではないでしょうか。私も、朔日の朝刊で読みましたもの」

「気付かれましたか、夫人」

　鋭い指摘だ。九月三十日、レストレイドが小雨降る中、馬車を駆ったエリザベス・ストライドとキャサリン・エドウズのが新聞報道されたのは、翌朝の十月朔日の朝刊である。この惨劇を新聞で読んだ赤の他人が、面白がってジャックを騙り、新聞社に送りつけた可能性も有り得るのだ。二十七日の記事とは信憑性が格段に落ちる。

　民衆に玩具を渡したのは警察の不手際だが、ここまで人間が低きに流れるものとは、楽観や日和見とは縁のないレストレイドも思わなかった。英国民は、もう少しがあるものと思っていた。

「リーはどう思う」

　呆けた顔で煙草を吸いながら、眉間の皺を寄せて難しい表情を浮かべる器用な男に意見を伺う。小手調べの意味も多分にあったが、返ってきた答えに閉口した。

「……言語とは、本質的には、宇宙から来たウィルスだ。盟友のローリー・アンダースンともその件で幾度か話した……意志の上部に言葉があり、我々は世界を言葉で認識している……ウィルスは媒介する。さながら爆発した切符のように、地表を覆い、我々を白痴の傀儡人形か、複製された機械仕掛けの黒んぼに仕立て上げる……いずれ我々を、意識の乗り物として見る者が出てきてもおかしくない……そこで俺がかのブライオン・ガイシンから教わった技法が功を奏すのだ。カット・アップ。手法は簡単だ。雑誌や新聞を縦横無尽に切り刻み、アトランダムに貼り付ける。破壊されたグラマーが全く新しいイクスプレッションを産み出し、我々は我々をたらしめている全宇宙的な管理から逃れることができる……そうだな、近いものはコラージュなどといった―」

「ちょ、ちょっと待ちなさい。リー。何の話だ」永遠に続くゼンモンドーか。レストレイドは思わずハドスン夫人と眼を合わせた。

「言われた通り、思っていることを口にしただけだ」

　ということは、レストレイドの話はほとんど聴いていなかったわけである。

「宗教の勧誘ならお断りだぞ、リー。私たちは切り裂きジャックを捕まえねばならない。寝惚けないでくれたまえ」

　強くいさめたつもりだったが、

「よく眠れたさ。ベッドは上だったが」

　―変わらず飄々としていた。

「そうか、それは良かった……」

　レストレイドは溜息を隠しきれなかった。故人には悪いが、会話が通じるかも怪しい相手を送り込んだホームズに、か殺意が湧いた瞬間だった。

　ホームズの下宿を図々しくも借りて仮宿としたリーと別れ、レストレイドは聞き込みのためにイーストエンドのアパートへ向かった。途中、捜査本部に寄り、忙しなく飛び回る局員たちを見て現実の時間に引き戻された。リーの調子で生きていたらそれは長生きできそうだが、真っ当な仕事に就くのは難しそうだ。

　ウェスト警部補の襟首と乗合馬車を捕まえて、芳しくない捜査の進捗具合を聴きつつ、惨劇の十字路へ向かった。

「有力な容疑者がふたり上がりました」

　ガタガタ揺れる馬車に身を任せつつ、渡された資料に眼を通すレストレイド。見覚えのある男が写っている。眉間に皺を寄せるレストレイドを見て、ウェストが身を乗り出して話しだす。

「兼ねてから当局にマークされていた、ロシア人医師のマイケル・オストログです。殺人の前科があります。次の……はい、それですね、エアラン・コスミンスキー。少々キ印の入った男でして、病を移された経験から売春婦を酷く憎んでいました。イーストエンド在住で、エリザベス・ストライド殺害とほぼ同時刻、黒いコートにフェルト帽で付近を走り去っていくのを見かけたものがいると」

「証言の通りだな」

「コスミンスキーは昨晩に任意出頭させ、マクドナルド警部補が応対しました」

「何か出たのかね」

「特別何か得られたわけでは……僕も立会いましたが、ペーパーバックを読み漁るのが趣味というかライフワークのようで、かなり空想に浸っているところが見受けられましたね」

「おかしいヤツにありがちな傾向だ」

「かといって、それが証拠になるかは怪しいですね。責任能力が無いことは、むしろ訴追を免れる起因になるほうが多いので」

　レストレイドは、人間の言葉が通じるウェストに、有り難みすら感じていた。

　下宿を出る直前、レストレイドはリーを連れて行くべきかしばし迷った。ホームズのお墨付きである上に、隣を歩くのを許したのはレストレイド本人だったが、未だに拭えない不審感があった。これで大事な物的証拠でも失くされた日には、地獄までホームズに恨み節を叩きに行かねばならない。

　古臭い趣味をしている割に存外考え方は常に先進的であったホームズは、現場を重んずる現代の科学捜査を強く信頼している男だった。それと同時に、時に安楽椅子に腰掛けてパイプとコークと新聞記事だけを頼りに、事件の真相を糾明せんとする特異な技も持ち合わせていた。どうせリーの痩せぎすな体躯では、連れ回しても七面倒な弱音を吐かれるだけだろう。彼にどれだけの推理力があるか、腕試しのつもりで訊くのも手だ。

　そういう経緯もあり、こちらはこちらで多少心許ないが若手のウェストを選んだ。

　そうこうしているうちに、ホワイトチャペルに着いた。

　まだ昼だというのに、なんと陰気臭い場所か。がゴミの中から吸殻を拾って口にくわえ、胸元を強調しただらけの娼婦が路毎に眼を光らせている。汚泥と糞尿がこびりついた壁の模様は、まるでっている悪魔の顔だ。これでは切り裂きジャック事件の真相は、実は幽霊の凶刃であったとするくだらない巷の噂も真に受けてしまいそうだ。

　路地裏にまわる。窓が無く、どれも同じく見えるアパートの中から目当ての住所を探し当て、軋む階段を上がる。木賃宿とさして変わらぬ外観のドアではあったが、一応、ドクター・オストログと銘打たれていたし、共同トイレも同じ階にあった。

　ウェストにノックさせる。

「―失礼、ロンドン市警ですが」

「な、何だ。免許は持っている。モグリじゃないぞ……」

「いえ、イーストエンド近辺での連続殺人事件について、少々伺いことが……立ち話も何ですから、少々お邪魔させてもよろしいかな」

　しかめ面で応対したオストログ。医者にしては随分と顔色が悪いものだ。ごわついた髪の張り付く禿頭の男だった。

　殆ど突入する形で無理矢理部屋に踏み入る。前科者に容赦する必要もない。

　オストログの部屋は思った以上に整頓されていた。部屋の中央に鎮座するベッドは手術台も兼ねているのか。居住スペースに無理矢理えたようで不恰好だが、ドヤ街にしてはましな設備であろう。あとは、医療器具を置いた食器棚、簡素な台所しかない。

　レストレイドの観察眼も腐ってはいない。ホームズの慧眼には劣るが、長年警部を勤めてきたという経験に裏打ちされた自負がある。

　この男が切り裂きジャックであるならば、返り血を受けたはずのコートを始めとする、シゴト用の衣服をしまう収納空間が必要だ。一見したところでは、それらしきものは見当たらない。後から収納を増やすといった自由が効くような土地ではないだろうし、その費用が捻出できるのであれば、たとえ前科持ちとはいえ、もう少しマシな家に越すだろう。

　咳払いとともに部屋を眺めていたレストレイドに、オストログが冷や汗を垂らして話しだす。

「もしかして、切り裂きジャックのことか……よしてくれよ、本当に知らないんだ。たしかに、口論になって離婚裁定中に妻を絞めちまったことはあるが、あれはとっさの……その、事故だ。もう終った事件じゃないか。オレにそんな、バラバラ殺人なんて大それた真似が出来るか！　娼婦なんて買いやしない、一日の癒しは薄めのジンだけだ」

「まあまあ。お時間は取らせませんよ。二三、質問するだけです。座って、どうぞ」

　ウェストが着席を促し、レストレイドはわざと億劫そうに帽子を取った。こういった一挙一投足が重要なのだ。レストレイドが部屋に来てから初めて、重い口を開く。それに合わせてウェストも手帳を開く。

「さて、先月、九月三十日の夜ですが貴方はどちらにおられましたか？」

　レストレイドのバスのかかった渋い声に、気圧される藪医者。

「オ、オレは患者を診てた。ヤンっていう中国系の、娼婦だ。避妊薬を出してやってるんだが、生理不順で客が取れなくなるのを嫌ってろくに飲みやしないんだ。だけど待ってくれ、こんなことでオレは娼婦に恨みなんか持ちやしないからな……」

「ふむ、そうですか」

　レストレイドは曖昧な返事で出方を見る。狼狽えている以外は特に興味深い仕草を見せない。今のところは、シロである。

　ウェストにをくれる。彼もこちらを見た。あとで裏を取るように指示しろ、というのが伝わったらしい。その際に、食器棚の下に押し込まれるようにして出来た本棚が眼に入る。使い込んだ医学書と数冊のペーパーバックがあるだけだ。珍しくもない。

　その後もいくつか質問をしたが、面白い反応は返ってこなかった。確かに必要以上にしている様子は見られるが、有力な証言とまでは行かない。いくら強引に起訴し、証拠をでっち上げたとて、勝訴は勝ち取れないだろう。

　小一時間問い詰めた後、レストレイドたちは外に出た。汚臭が鼻につき、外出の開放感など皆無であった。

「どうでしょうか、レストレイド警部」

　ウェストがメモをめくりながら、語りかけてくる。年季の入った観察眼を披露してやるつもりだったが、得られた情報はウェストたち捜査員が事前に集めたものとさして代わり映えはしなかった。

「正直言って、さほどの情報は得られなかったな。どこにでもいるボッタクリの医者だろう」

「ですね。確かに証言から得られるものはありませんでしたね」

「君はどうなんだ？　何か気付いたかね」

　ウェストも首を横に振るものと思ったが、意外に何か言いたげであった。

「大した発見ではないのですが……」

「いいさ。そういうものが解決に繋がる」

　言いにくそうにしていたから、余程のことかと思っていたが、内容は拍子抜けであった。

「シェリングフォード・シリーズを御存知ですか、警部。そのペーパーバックが容疑者の部屋にあったな、と」

「ん……？　何かと思えば、小説かね」

「いえいえ、本当に、大したことではないので。コスミンスキーも読み込んでいたと自供していたものですから、妙に覚えてしまっていたのです。それより警部、この後は……」

　慌てて話題を反らしたウェストから察するに、ウェスト自身もその小説のファンなのだろう。だから妙に頭にこびりついてしまったのだ。レストレイドとて、さして鋭い意見を述べたわけではないが、ウェストがあまりに些末なことに注目していたので、彼のなかでこの若造に対する評価がだいぶ下がってしまった。とはいえ、

「まあ、そういうことも大事だよ、ウェスト君。一応メモしておきたまえ」

　と大人らしく対応した。

　※

　―レストレイドが容疑者の尻子玉を抜いている間、リーは二度目の昏睡状態から醒めた。サンドイッチで腹を満たした後、ニューヨークから持ってきたタイプライターを猛然と叩きながら、手を休める度、手許にあったコカインをちびちびとやっていたのだ。今度は多少酒のほうの分量をキツめにしたところ、面白い効果が現れた。

　時間の概念が溶け、あらゆる身体上の制約から開放される。タイプライターはひとりでに小説を打ち込み始める。リーは筋を追うことを止め、状況を整理することを止め、背景と同化する。脳内に広がる原風景だ。

　機械化された文明の鉄塔が崩落していき、人々がホルスターに入ったリボルバー拳銃の回転に飲み込まれていく小説を書いていた。活字がバラバラになり、意味から意味が剥奪されていく。これは以前、ベンゼドリンを大量に摂取しながら古新聞を読み込んでいったときの症状だ。リーは身の危険を感じ、感覚を遮断することに決めた。管理から逃れる必要がある。このままでは、視覚化されえぬ映像に飲み込まれ、自我を奪われるおそれがあった。リーは手許にあった雑誌の束から一冊抜き取り、適当に切って原稿に貼り付ける。ゴキブリ駆除業者のホモの少年が、衛星軌道上に現れたアメリカン・スーパースターにさらわれる話に挿入されたのは、地質学における新発見の論文であった。このふたつの出会いはリーを大変驚かせた。タイトルを付ける必要があるが、ためになることを言ってくれる旧友のアレンもケルアックも海の向こうだ。酷いものだ。いて欲しい時にいない友人など、ただの害悪だ！

　激昂したリーは、怒りを鎮めるためにベッドに這い寄ってしばしの仮眠を取る。血管が開き、そこから叡智とロンドンに立ち込める汚れた霧を吸い込んでいくのがわかった。

　神経を完全に開きながら見た悪夢は、文章化できない。これは読んではいけない類のもののような気がした。それは永遠に続くジャンキーたちの礼拝だ。捨てるには惜しかったが、イメージのハレーション自体は然程問題ではない。いくらでも量産できる。大事なのは管理することだ。自分と、宇宙を。

　数時間の惰眠から目覚めたリーは、あまりの気持ち悪さに、窓へ駆け寄って嘔吐した。驚くべきことに夜が明けようとしていた。俺は何日眠っていたんだ―？　身体を痙攣させながら吐きまくる俺のもとに、レストレイド警部が駆け寄った―

　※

　この廃人をどうしようか、持て余している。レストレイドは頭を抱えた。

　起き抜けのハドスン夫人とともにリーを介抱し、部屋中に散乱する紙片の束と、転がる薬瓶から漏れる混ぜ物の酒も、眼を擦りながら片付けた。下宿に帰ってきた時点で時刻は二時を過ぎており、リーの様子だけ見たら、あとは自宅に戻ってベッドに身を放り投げるだけ。であったはずなのに。

　いますぐ本国に、突き返してやろうか。

　怒りのままにリーを窓から蹴落とさなかった理由は、ホームズへの多大な感謝と尊敬の念以外の何物でもない。遺言の間違いが見つかったら、詐称の罪で即日投獄してやってもまったく構わないとさえ思ってきた。都合の良い法律はないものか。

　こっちが靴底を擦り減らしながら聞き込みをして帰ってきたら、まさか薬物をヤリすぎてトリップしているとは思わなんだ。キ印がどうのと言われていたコスミンスキーよりも、遥かに身内のほうが狂っていた。

「ふう……片付きましたわ」

　ハドスン夫人が額の汗を拭き、もはやレストレイドにまで非難の視線を浴びせるかのように、一瞥をくれて去っていった。言葉を交わすのが馬鹿馬鹿しく感じられたのか。無理もない。窓辺に立ち、汚れたヘリを触らぬようにして、見えもしない星を眺める。

「嗚呼、シャーロック・ホームズ。助けてくれないか」

　寝息を立ててベッドに横たわるリーを見ながら、レストレイドは最後の願いを手紙に認める。宛先は―本当は迷惑をかけたくなかったのだが―ロンドン随一の名医だ。

　薄暗い下宿の部屋で松脂の燃える匂いを嗅ぎながら、でもするかのように丁寧に、「ジョン・ワトスン氏へ」と書き付けた。

　悲痛な過去、終った関係。近況を伝える連絡ひとつ寄越さずに隠遁しているワトスン氏は、その物言わぬ態度から、すでに自分など忘れて去られているかと諦めていたレストレイドだが、それはどうも杞憂であったようだ。

　返事は、数日と待たず、すぐに来た。ワトスンの手紙は、古女房に改めて礼を云うような、気恥ずかしくも感謝のこもった温かい筆致であった。涙脆くなってきたのか、置かれているな環境からか、どうにも涙腺が緩くなってしまった。

　手紙はこんな次第であった。朝靄立ち込める早朝、我慢できずに下宿の玄関先で封を開け、一気に読んだ。

拝啓

　どうもこういった畏まった手紙は苦手でしてね。根が軍人だから、実は大雑把なところが露呈してしまって恥ずかしいですよ。というわけで、早速本題に移らせて頂きますが、よろしいかな？

　今回の事件、イーストボーンの果てでひっそりとしている僕の耳にも届きました。そういった意味でも、僕なんぞを頼っていただいて大変光栄です。逃げるように郊外へ隠居したものだから、とっくに見放されたものだと思っていました。こうして連絡をしていただけるだけでも嬉しいものです。

　本職の刑事がこうして電報をくださるほどですから、相当に手強い相手なのでしょう。どうか打ち負かされぬよう。数々の事件を解決に導いたレストレイド氏ならば、きっと今度だってその例に漏れることはありませんでしょう。

　駄文を連ねるばかりですね。忙しい御身でしょう、お時間を取らせて申し訳ない。しかしながら、伝記作家に出来ることなどたかが知れています。私がロンドンへ向かったとて、どうして事件が好転しましょうか。折角のお便りですが、期待に応えるのは難しいようです。

　―その代わりといっては何ですが、ひとつ提案を。

　ディオゲネス・クラブの門を叩いてみては、いかがかな。

　私の記憶が正しく、尚且つまだあそこで偏屈な兄君が帳簿を睨んでいるのであれば、たとえこれ以上の危機が訪れようとも、必ずや道を開く手助けをしてくれるものと信じます。な割に文通は別腹のようで、まだ交流も続いておりますし、私からも声をかけておきましょう。

　では、お身体に気を付けて。親友ジョン・ワトスンより。

敬具

　いつの間にか回復していたリーが、レストレイドの肩越しに手紙を読んでいた。それに気付き、レストレイドは涙を拭う間もなく飛び上がって驚いた。リーは、口角を上げて不気味に笑う。

「Ｍに、会いに行くのか……？」

　人嫌いが集まる会員制の倶楽部―ディオゲネス・クラブに辿り着くのは、少々手こずる。

　一見様は場所はおろか存在すらも知れぬこの秘密組織は、とある私設図書館の地下に入り口を設けてある。乗合馬車の御者にチップを渡して、暗号を示せたものだけが、クラブのある通りへと運んでもらえるのだ。

　ホームズが遺してくれたメモと、ワトスン氏の口利きによって、難なく馬車に揺られることが出来たレストレイドとリーは、道中事件について語り合った。すでにリーは眠そうに瞼が半分閉じていた。

「……というわけだ。リー。ドクター・オストログとコスミンスキーはたしかに危ういところのある印象だったが、どちらもアリバイがあった。オストログは患者を診ていたし、コスミンスキーもクスリを使って寝ていた。どちらも第三者から、証言の裏は取れている」

　リーは鼻を鳴らし、頬を掻いた。

「では、犯行は不可能だろう……」

「確かにそうだが、逆に言えばアリバイを崩せれば、どちらもかなりの有力候補として上がる」

「逆に言う意味は？　簡単に崩れそうのか？」

「……いや、そういうわけではないが。だがしかし、オストログは曲がりなりにも医者だ。子宮泥棒には向いている」

　どうも調子が狂う。リーの口調は常に人を食っている。そもそもイーストエンドの連中の証言など当てにならないからな……と続けようとして、止めた。それでは自分が何をしに貧民窟に降りたのかわからなくなる。

「他には？」

「他に？　ああ、特に目立つものはないさ……どっちも似たような部屋に済んでいるからね。窓のない襤褸アパートだった」

「いや、そうじゃない」

　リーは言葉を選ぶというか、思い出そうと両手で空を切った。

「その、共通項というのか、ふたりを結ぶものはなかったのか？」

「結ぶもの？」

　リーの言う通り、切り裂きジャックを単独犯としない説も根深いが、前科者の医者と精神病患者が共謀するとは考えにくい。

「気持ちは解らんでもないが、難しいところではないかね」

「何が？」

「いやだから、オストログとコスミンスキーの共犯と考えるのは、難しいだろう。節点がない」

　リーは虚を突かれたようだった。

「なるほど、流石は警部。そうも考えられるか……感心するね」

　今度はレストレイドが困惑する。

「いや、リー。君が共通項云々を持ち出してきたから、私はてっきり君がそう考えているものだと思ったんだがね」

「俺が？　そういうわけじゃない……単なる思いつきだ」

　レストレイドはリーを評価しかけたことを悔やんだ。

「共通項か……そうだな、そう言えば連れて行った若いのがふたりともシェリングフォード・シリーズを読んでいたと……」

「シェリングフォード？」

　リーも喰い付いてきた。何だ、そんなに流行っているのか。

　シェリングフォード・シリーズというのは、大衆紙『ストランド・マガジン』に連載しているアーサー・コナン・ドイル卿によるだ。天才的な知能を持ったシェリングフォードという私立探偵が、次々と舞い込んでくる難事件を、快刀乱麻を断つように解決するというあらすじで、好事家の間でも評価が高い。登場する魅力的なキャラクターたちはすべて、著者の好意により、自由に自作に組み込んで構わないことになっている。これにより、プロ・アマ問わず多くのが、を書いているのも、人気の秘密だ。

　作者のコナン・ドイルはケンブリッジ大で近代文学の客員教授をする傍ら、忙しい合間を縫って小説を編んでいる。現在までに単行本にして七作刊行されている。一度も原稿を落としたことがないというのだから、余程の速筆家なのだろう。成功者というのは膨大な努力と研鑽を惜しまないものだ。

　一方で、近年では作品により作風や文体にバラつきが出ており、固定化された評価が覆ろうかとしている、という意見もある。往年のファンも手厳しい。

　―ウェストの話の後、急いで調べた付け焼刃の知識ではあるが、必要になるかは定かではない。所詮フィクション。シェリングフォードのような男は、現代のロンドンにはもういないのだ。レストレイドはまたしても述懐に嵌ってしまいそうになる。

「俺も読んださ。悪くない出来だ……そう、ロンドンに来たのは……そいつに会いたかったのもあるんだ。刺激が欲しいからね」

　リーはレストレイドの郷愁癖を無視して、無茶な夢を語り出した。そういえばこいつも小説家であった。芸術家という免罪符が、ここまで機能していない男も珍しい。

「作者のドイル卿は多忙だろう。数年は待つことになるぞ」

「時間は問題ではないさ……」

　本音なのが怖いところだ。「数年も刹那も変わらない」彼の言葉を代弁すると、「警部もわかってきたじゃないか、麻薬時間を……」と物騒なことを語りだす。どういう概念なのかは知らないし、知りたくもない。とにかく、一緒にするな。

　―馬車がガタン、と揺れた。御者が顔を出し、着いたことを知らせる。レストレイドたちが馬車を降りると、燕尾服の老人がどこからともなく現れた。老人が帽子を取ると、見知った顔が現れた。

「レストレイド様。ようこそ、ディオゲネス・クラブへ。メラスで御座います」

　メラス氏は人嫌いのクラブに従事している割に、道中で様々なことを朗々と語っていた。クラブ自体も面会室までは喋っていいという規則があるから、別に違反しているわけではないそうだ。

　禁書架の一角から本棚を動かして地下へ降り、長い廊下を歩く。点々と設えられた灯りで、さして明るくも暗くもない。だが、均一でないから距離感が掴みづらい。まるで異界へと続くかのようだ。レストレイドはそこまでその道に明るくはないが、秘密結社の入社式を思わせると感じた。

　リーもまたぶつぶつと何かを口にしていたが、メラス氏のよく通る声のせいで、聴き取れなかった。

「ギリシャ語の通訳にまつわる事件は聴きましたかな、警部。あのときにホームズ様のお力添えがなければ、わたくしは大変な迷惑を被るところでした。本当にあの方はロンドン市民のことを第一に考え、正義の光のもとを歩み……」

「失礼、メラスさん。この廊下はいつまで続きますかな」

「もうじきでございますよ、警部」

　メラス氏の言葉通り、廊下は終わり、荘厳な扉がレストレイドたちを出迎えた。メラス氏は厳重にかかった鍵をてきぱきと開けた。開かれるとき、やや埃っぽい匂いが鼻についた。

　簡素な面会室では、少し肥えた紳士が、足を組み新聞を読みながらレストレイドたちを待っていた。その面立ちはどこか、有名人である彼の実弟に似ていた。顰め面を崩さずに、マイクロフト・ホームズはふたりを出迎える。

「こんななところまでどうぞお越し下さった。レストレイド警部。わたしがマイクロフト・ホームズです。弟のような大それた芸当は出来ないが、あなた方のご足労に見合う努力を致しましょう」

「こちらこそ。かのマイクロフト氏にご意見を伺えるとは光栄です」

　断定的での気がある喋り方は、血筋がなせるものなのか。彼こそがシャーロック・ホームズの実兄であり、この偏屈なクラブの発起人、マイクロフト・ホームズ、通称Ｍだ。いくつかの官庁で会計監査をする下級役人の身であるが、その明晰な頭脳にはホームズも脱帽するほどで、「活動的であれば自分より優秀な探偵になりえた」と生前のホームズは繰り返していた。彼そのものが国家である、とまで話すのだから相当なものである。

　メラス氏が用意した椅子にレストレイドとリーが腰掛けたのを確認して、マイクロフトはパイプに手を伸ばした。

「さて、助言と呼べるかはわかりませんが……」

　パイプを吹かし、間を作る。

「わたしはこの一連の事件を劇場型犯罪と呼びたい」

「聴き慣れませんな」

　そこで初めて、Ｍは僅かながら相好を崩した。

「そうでしょう。わたしの造語ですから。しかしながら、手前で云うのも何ですが、言い得て妙だと思いますよ」

「というと？」

「オペラを思い浮かべて欲しい。主役が犯人、脇役は警察、観客が市民という構図ですな。切り裂きジャックはセンセーショナルな事件を起こすことで、この一連の捕物帳をドラマチックに演出します。観客は刺激的な興行を目の当たりにしたときと同じく、誰かと物語を共有し、その噂の波紋は鼠算式に巷間へ広がっていくのです」

「はあ、確かにその通りですな。事実、ヤードの方にも『私がジャックだ』といういたずらが何件も寄せられている」

「ロンドンの貧民街という鬱屈した環境、近年急速に発達した報道、そして何より話題性の強い突飛な事件そのものが、このたちの悪い悲劇の公演を成り立たせているのです。愚かしいことですな」

　そのセリフの相手先は、ロンドン市民かヤードか、それとも両方か。

　マイクロフトは続ける。

「わたしとて、現場に足を運ぶ警察ほどに犯人の目星が付いているわけではない。それを適当に当てようとするのは不遜ですからな。しかし、注意を促すことはできる」

「注意……ですかな？」

「これまた、良い言葉が思いつかないのですが、言うなれば模倣犯というべきでしょうか」

　レストレイドは字面を思い浮かべる。模倣犯が正しいだろうか。

「恨みや辛みが根幹にない以上、事件が事件を産み付けます。この切り裂きジャックの凶行に影響を受けた未来の犯罪者が、新たに犯罪を起こす危険性があるというわけです。場合によっては、最初のジャック・ザ・リッパー以外はすべて、他者の犯行であってもおかしくはないですね」

「……なるほど」

「事実、切り裂きジャックのものとされておらず、且つ近い日時と場所で起きた殺人事件の多くは、子宮を取り出すような器用な真似をしていない、ただの滅多刺しも散見されている。模倣者が解剖学に精通していなかったことは明らかだ」

　何も共謀でなくとも、複数犯である線が完全に消えるわけではない、ということか。

　まるでレストレイドは、ホームズと話しているかのような錯覚を覚える。確かにホームズではあるが、ファーストネームが違う。

「のべつ幕無しに喋ってしまったが、して、そちらの御人は……？」

　マイクロフトが視線をリーにやる。リーがいつも通りのれた声で自己紹介する。

「ああ、俺は……ビル・バロウズ。アメリカで小説を書いている。もっとも、数年ほどは帰ってないが。仲間からはリーだの、ゴーストだの呼ばれている。昔ちょっとツルんでたことがあって、今回の事件で直々にホームズから指名されてね……わざわざ英国までやって来たのさ……」

　リーとばかり呼んでいたから気付かなかったが、なかなかどうして妙なアダ名だ。何か逸話があるのか、それとも作家らしく自身の作品が由来か。

「ほほう、そうですか。弟も顔が広い。英国はどうでしょうか、ゴースト氏」

「臭い」

　一瞬の沈黙の後、マイクロフトは破顔する。

「でしょうな」

「タンジールや、グリニッジ・ヴィレッジとは違う。このにおいは嫌いじゃないがね……」

「数奇な考え方をお持ちなようだ。まあ、わたしとてコレラさえ気を付ければ住めないことはない。露西亜よりはマシでしょうな」

「あの辺はわからんね。人の顔をした機械が歩いていると聴いた」

「面白い話だ。雪に耐える機械ならば、わたしも興味があります」

「さしずめソフト・マシーンか」

　レストレイドは、さっぱり意味がわからない会話を続けるふたりを、止めてよいものか迷っていた。

　その後もいくつか質疑応答をし、時間帯がわからぬ地下室をおする段になって、リーが思いもよらぬ要望を出した。

「マイクロフトさん……ホームズから、貴方は結構なポストに就いていると聴いた……それにこのクラブも、羽振りのいい輩が揃い踏みなんだろう。どうだろうか、ドイル卿に会わしてくれないかね」

　素っ頓狂な質問に一瞬面食らったマイクロフト氏。

「ドイル卿というと、シェリングフォードの？　ああ、貴方も小説に携わっている人間でしたね」

「無理にとは言わないが、少し訊いてみたいことがあるんだ……」

「なるほど……わたし自身はドイル卿と直接の面識はないが、クラブの人間で交友のある者がいたら、連絡しましょう。とはいえ、変わり者の集まりですので、あまり期待せずに」

「わかった。悪いね……」

　リーがディオゲネス・クラブで言葉を発したのは、自己紹介を含めてこの程度だった。

　その後、ふたりはクラブから帰宅し、一旦ベイカー街の下宿に戻った。辺りはすっかり夜の帳が下りていた。ハドスン夫人の作ったサンドイッチを頬張りながら、叩き壊す勢いで小説をタイプするリーを尻目に、レストレイドは眉間を指で抑えていた。

　結局まとまった意見は貰えなかった。苦悩に次ぐ苦悩。あのホームズの兄なのだから、何となく予想はしていたが、評論家の真似事をされたところで犯人が捕まるわけではないのだ。ワトスンには申し訳ないが、果たして何のためにクラブまで出向いたのか……

「いやはや、お手上げですよ、夫人」

「マァ、滅多なことを。いけませんわよ、警部殿」

　自分でも驚くほど乾いた笑いが漏れたレストレイドであった―

　そうして、数日が過ぎる。

　※

　―レストレイドが別の事件の捜査に駆り出されている最中、リーは寝ぼけ眼を擦り、ケンブリッジ大の客員教授控え室に向かっていた。一週間と待たず色良い返事が来たことで、リーの足取りも軽い。十月は中旬に差し掛かろうかとしていた。

　守衛に客員教授室の場所を尋ね、構内をうろつく。前途有望な学生たちが、何やかやと話し込みながらキャンパスを練り歩いている。ハーバードでの数年間を思い出す。マズい成績ではあったが、友人は多かった。あの時分に弁護士とのコネクションを作っておかなかったら、今頃リーは豚小屋だろう。

　客員教授控え室は雑然としていたが、人気はなかった。まだ授業中だろうか。積み上げられた書籍と棚が窓を遮り、真昼だというのに薄昏い。その合間から差し込む光がやけに優しげに見えた。

　棚を少し覗いてみると、一般書籍と学術書、紀要とが複雑に混在しており、部屋主の繁忙さを表している。

　シェリングフォード・シリーズは、しかしながら目立つ場所に陳列されていた。学生の質問に応えるためか、埃も積もってはいない。一冊手に取り、パラパラとめくると、強烈な既視感に襲われた。未読とばかり思っていたが、タンジールで読んだのかもしれない。

「―おお、いらしたか。リー氏でしたかな」

　野太く唸るような声のほうを向くと、サイズの大きいインヴァネス・コートを颯爽と羽織る紳士が立っていた。今や、ロンドンで知らぬ者はいないとされる、ベストセラー作家のご登場だ。目深に被った中折れ帽と蓄えた髭の合間から、優しくも厳しい眼差しをこちらに向け、両手を広げて歓迎のジェスチャーをする。世間離れした所作は大袈裟で、いかにも学士、いかにも象牙の塔といった具合である。

　ドイルはリーの掌中にあるものを見て、嬉しそうに二度頷いた。

「ドイル卿……」

「あなたもシェリングフォードの件で何か？　あまり時間は取れませんが、どうぞ、こちらに」

　ドイルは、廊下に顔を出して紅茶を持たせるよう告げ、古書の山を一旦退かして作ったスペースに、どこからか椅子を引っ張り出してきた。リーは腰掛け、そういえば質問らしい質問などなかったことに気付く。何も訊かないのも不自然であるから、何か口にしようと考え出した。今日はすこぶる気を遣っている方だ。

「ディオゲネスの方から連絡がいっているとは思いますがね、小生も小説を書いている。それでいくつか訊きたいというか、話しておきたいことがありましてね……」

「失礼、貴方はの者かな？」

「ええ……」

「なるほど。亜米利加人にも有望な作家は多いですからね」

　そういってドイル卿は億劫そうに腰を上げ、窓辺の棚から幾冊か取り出し、をめくりながら話を続ける。

「四一年に、あなたの本国亜米利加で、エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』が出ましたな。私はまだ右も左もわからない若輩者でしたがね。大変興奮して読みましたよ。『盗まれた手紙』などもね。ポーが貧困に喘いでいなかったら、もっと素晴らしい作品が世の財産になっていただろうに。まったく、惜しい人から亡くなっていくものだ。そういう意味では、オーギュスト・デュパンなどは私のシェリングフォードの原型といってもいいだろう。ああ、勿論、惜しいというのであれば、現実の名探偵であるシャーロック・ホームズにも眼を配っていましたよ。めていたのはワトスン氏だったかな？　それは、到底ノンフィクションとは思えないのですがね、氏の筆力も込みで考えますと、あれも本当に面白い物語ですからな」

　リーには退屈な話だった。よって、話をそらしてみる。

「……では、ドイル卿。貴公は小説が世間にどのように作用するとお考えで……？」

　ドイルはずいぶん話が飛んだことに驚きながらも、沈思黙考するように額に指を当てる。本を置いてリーのほうを向き直り、深刻な態度で言葉を紡ぐ。

「確かに、昨今の評論家は、探偵小説を、ショッキングなだけの卑俗な大衆娯楽と捉えがちですからな。まるで我々が、殺人を奨励しているかのような言い草までしくさる。こちらはまったくそんなつもりはないのですがね。わかって頂けるかとは思いますが。新しい文学表現のに立ち会っておるのですからな。これから先、探偵小説はありとあらゆるジャンルを飲み込み、細分化しつつも大道を忘れずに……」

「嘘でしょう。そういうことが訊きたいのではない」

　ドイルは口をむ。リーはまっすぐにドイルを睨んだ。

　しばし、沈黙が流れ、ドイルがゆっくりと口を開く。

「……嘘ですか。かもしれませんね。どうもビル氏は慧眼をお持ちのようだ。文学史的な立ち位置などは、後世の評者や読者が決めればよいことです。作家が口を出せる範疇ではない。大切なのは影響力、そう言えますでしょう。自分の文章、自分の言葉にどれだけの波及力があるか。大衆は私の声をどう受け取るのか、どれだけの人間が受け取るのか。それを試す、言わば知のスポーツです。売上は端的にそれを表しますし、私も俗物根性がまるでない聖人君子ではない。小説は、読者という化け物との闘いとも言えるでしょうな」

「言語は攻撃性を帯びている……」

「さよう。力のない言葉は淘汰され、消えていきます。現に、聖書やコーランは、絶対に死なない」

　そういってドイルは換気のためか、窓を開け放った。

　一陣の風と学生の騒ぐ声が、初老の男たちの頭上に舞い込む。夏は終わり、乾き始めた風が、びゅうと鳴いた。連日続いていた雨が今朝止んだばかりだというのに、相変わらずの薄曇りが高空で伸びていた。

「我々は、似たような考えをお持ちのようだ……」そういってリーは腰を上げる。まだ紅茶も来ていなかった。

「もうよろしいのかな？　―とはいえ、私もあまり長居は出来ないのだが」

「充分ですよ、卿。面白い話が聴けた……」

　リーは挨拶もそこそこに控え室を出た。彼がドアを閉めたのを確認すると、ドイルは椅子を仕舞ってドカリと腰を落ち着けた。すれ違いざまに入ってきた秘書から、リーに振舞われるはずだった紅茶を貰い、一息に煽った。

　―リーはそのまま帰宅し、下宿に篭った。途中の薬局でモルヒネを買い込み、多少心許ないが、執筆の足しにしようと考えたのだ。ヘロインを生成しようとも考えたが、器具を持ち合わせていなかったので、敢えなく断念した。ヘロインも薬局で取り扱ってくれるようになれば、面倒が少なくて嬉しいのだが。

　リーはタイプライターに向かい、モルヒネとこの前の混合酒を少々ヤリながら、またしても雑誌を切り始めた。管理に抗うにはこれしかない。最近はかなり筋の通った小説ばかり書いてしまっている。筋書きや物語は統制された情報だ。管理者の文化だ。そういったものから遠く離れ、予期せぬ出会いを生み出さなければならない。史上、常に小説家は文化の最先端にいたし、これからもそうでなくては。リーはホームズの部屋にあった書物という書物をはさみで切って、出来上がった原稿に乗せていく。ものによっては角度を変えたり、折ってみたりして、偶発的に発生したフレーズを、なるべく意味の存在しない文章を、作り上げていく。かのロートレアモン爵が、「ミシンと洋傘との手術台のうえの、不意の出逢いのように美しい」と書いたように。

　我々は書かなければならぬ。書けないものを。逃げなければならぬ。逃げられぬものから。

　リーの意識は次第に分裂し始め、奇妙な夢を見始める。正確には夢ではない。覚醒している。視界はしっかりと下宿を捉え続けている。ただ、意識だけが、別の次元に移行しているのだ。稀に起きる。

　恐らくは、切り裂きジャックにまつわる話を日がな聞かされているからであろう。夢の内容は、永遠に続く夜道で血まみれのコートの男を追うといったものだ。コートの男はハハハ……と高笑いしながら、リーたちの追跡から逃れる。何故だ？　この夢は何かを暗示しているのだろうか？　それは危険だ。管理者に視られていることになる。リーはリーであることから逃げなくてはならないのだ。言語を用いて。自らを執拗に攻撃し、自らから乖離していく。しかしながら、このあまりに単調で俗物的な夢から離れることがまずは肝要だ。くだらない殺人鬼と追い掛けっこをするために、リーは暇を割いてケンブリッジ大まで行ったわけではない。まずは、切り裂きジャックなる男の尻尾を掴んでやらねば……

　必要に迫られて初めて、ジャック・ザ・リッパーについて深く考えることとなったリーは、彼という人間を突き詰めることにした。しかし、ドラッグ中毒でもなければ、精神病患者である可能性も薄い気がしてきた。彼らは彼らなりのルールに従っている。狂信的にそのルールを守ることが、彼らの唯一の行動規範だ。麻薬時間に沿わないジャンキーなどいない。

　であるという説が最も有力だ。宇宙的な意志が娼婦たちのを盗み出し、下水に放り投げて溶かしている。ロンドンの薄曇りは、その蒸気で出来ているのだ。そういったほうがイメージとして、詩として正しいようにリーは感じた。霊的なものをヤードが捕まえる小説を、いつの間にやら書いていた。これはマズい。役人と警察はモチーフとして良くない。不健全だ。システムの側だ。リーは散らばっていた雑誌や新聞を、再度かき集めた。市内詳細地図、ガーベラの育て方、煙草名鑑、ザ・ピープル―

　もう一度だ。もう一度立ち返る必要がある。既に身体の芯は震え、眠気は峠を越し、もはや覚醒と昏睡に境がなくなり始めていたが、リーはタイプし、雑誌を切った。モルヒネも吸っていた。すると、が晴れる瞬間が幾度かあって、天啓にも似た何かが降りてくる体験をした。シャーマンたちの降神術に近いかもしれない。ＬＳＤ抜きでコレならば、ニールやアレンにも教えてやってもいい。

　つまり、シャーロック・ホームズは何故、リーを呼んだのか？　何故、リーでなくてはならなかったのか？

　リーは決定的なことを思い出し、その場にうずくまって、眠った―

　※

　レストレイドは溜息を吐いた。腹の底から、殺意を込めて。

　別の事件でホワイトホールまで出張っていった帰り、ウェストから、キャサリン・エドウズの死体などが収まっている安置所が、実は医学校の年端も行かない学生が管理していたことを聞かされた。当然、死亡直後から死体の状況は変わっており、然るべき対応も取られていない。近年目覚ましい進歩を遂げた科学捜査であっても、ホトケが穴ぼこだらけではメスの刺しようがない。まごうことなき、警察の手抜かりだ。上層部は責任をどこが取るか、躍起になってなすりつけ合っているだろうが、そんなことをしてジャックが捕まるのなら、今すぐレストレイドが辞職してやってもいい。

　世論が囃し立てども、ジャックが女を切り裂けども、こちらは他にやることが山積みである。捜査本部もひとりふたりとバラけてきて、迷宮入りという禁句をちらほら聴くようになってきた。今までは、莫迦野郎！　と恫喝して顔に水でもぶっかけてやるレストレイドであったが、最近では咎める気力すらない。

　カレンダーは十月の二十日を指している。八月の末日にメアリ・アン・ニコルズが死んでから、二ヶ月が経とうとしていた。

　木綿商人やユダヤ人の精肉業者、アメリカ人の医師など、容疑者ばかりがいたずらに増えていき、有力と目されている者だけで、野球の打線が組めそうな具合になってきた。リストのどいつもこいつも、血痕付きのコートが見つかったり、現場近くに落ちていた煙草と同じ銘柄のものを吸っていたり、娼婦を毒殺した経歴があったりと、充分に裁判で戦える証拠は出ているのだが、決め手がない。こいつこそ切り裂きジャックだという、決め手が。

　逆に言えば、たとえ冤罪であろうと、別に誰が切り裂きジャックであろうと構いやしないのだ。世論が泣こうが喚こうが、とんだ拍子抜けのオチだと罵られようが、そこいらの凡夫が連続殺人鬼であっても、それが現実ならば大団円の幕引きなのである。

　だが、上手く行かないのも現実だ。で決めた犯人を牢に繋ぐことで、連続殺人が終わり、次の死人が出ないのであれば、ヤードも心を鬼にする。というか、とうの昔から鬼にしている。

　問題は、このリストの全員をお縄にしたところで、また一人娼婦が無残に殺されることが、眼に見えているところなのである。マイクロフトの言が耳に響く。誰から、誰までが切り裂きジャックなのか―

「どうしたものかね……」

　深夜の捜査本部でひとり、乗合馬車の時刻を確認しながらぼやいた。あまりに切なくて、レストレイドは自分の運命を呪いさえした。せめて自分がもう少し若ければ、せめてホームズがもう少し長く生きていてくれれば、せめてリーが……もう少しまともでいてくれたら。

　―いや、よそう。レストレイドは首を振った。故人にるから思考が冴えないのだ。ホームズと違って、元々が現場百遍の肉体派。知識でなく経験。犬の真似が出来なくて、何が刑事か。匂いから追い詰めてやる。嗅ぎつけてやるぞ。犯罪の匂いを。

　レストレイドは何とか自分を鼓舞し、捜査本部を後にした。まずは英気を養おう。今日は酒を呑み、明日一番でイーストエンドに向かおう。何かわかるかもしれない。髪の毛一本でも拾ってやるぞ！

　外を出るとめっきり冷たくなってきた外気がレストレイドを襲った。厚手のコートを引っ張り出してくる時期だ。夜は濃く重たくなっていき、長い冬が訪れる。

　つまらない話が流行っているものだが、人の生き血を吸う怪物がするといったルーマニア由来の民間伝承が、英国中の子どもたちを騒がせているらしい。くだらん。一笑に付すことは出来るが、逆に言えばそれだけしか出来ない。物語の持つ恐怖の力は、荒唐無稽であればあるほど、聴くものの心に深い爪痕を残していく。そこに信憑性などいらない。人は怪物そのものを恐れるのではなく、自らの想像力に恐怖を覚える。

　他にも、自らが生殖能力を持たないため、襲う者の理想的な外見に変化し、夜な夜なその精を奪い尽くす魔物の存在もまことしやかに囁かれている。大方、ふしだらな女子が、親の知らぬ子を身篭ったところの苦しい言い訳に過ぎないだろう。だが、信心深い家庭などでは、「夢魔が間違えて持って行くから」と、精液に見立てた一匙の牛乳を、子どもの枕元に置いて眠らせているところもあるという。このままでは、切り裂きジャックもそのうち神格化されてしまいそうな雰囲気だ。

　夜がレストレイドを見張っている―密やかに、爪を砥いで―

　連日の心労もって、彼は気が違ってしまうかと思われた。そこの角に、怪物が。その通りには、魔物が。その門から、血まみれの娼婦が。

　静かな夜を通り過ぎる男たちは皆、ジャックの手先に見える。善良な市民は実はハットの下で顔を歪ませて、レストレイドたちの失態に怒りをぶつけているようだ。彼は馬車乗り場までに擦れ違う者すべてに呪詛の言葉を吐かれている心地であった。

　―劇場だ。

　ロンドンは犯罪の劇が執り行われているホールだ。

　観客は更なる惨劇を求めて、出血が噴き出す度に拍手喝采。パイプを吹かし、紳士も淑女も大口を開けてっている。切り裂きジャックはマントを翻して舞台を跳び回り、銀のナイフを月明かりのスポットライトに反射させて凶行に次ぐ凶行を演出する。殺戮が殺戮を呼び、百人がれ、千人が逝こうとも未だまずと客はチップを放り投げる。新聞と血液が子宮状の円形ホールを回旋し、端役の警察はおろおろとそれを掻き集める。それを見て客はまた指をさして笑う。市民の顔をした下賤な客が……

　レストレイドは妄執にとりつかれ、馬車乗り場の立て看板にれた。眼を閉じて、内なる闇に心を落ち着けようとした。

　月は、未だ雲に隠れていた。

　翌朝。現場に出向く前に下宿の様子を見に行った。果たしてリーは念願のドイル卿に出会えたのだろうか。ディオゲネス・クラブに足を運んだあの日以来会っていないし、会う用事もない。すでに彼から事件に関する助言を得ることは諦めていたが、それでもこうして暇を見つけてはベイカーに出向くのは、彼の食事の世話をするハドスン夫人の顔を見に行くためである。コカと酒とタイプライターさえあれば、リーは仮宿が留置所でも気に留めないだろう。ハドスン夫人の苦労を軽くするためにも、いっそ移してしまおうか。

「夫人、失礼しますぞ」

　下宿の玄関で声を張るが、返事はなかった。買い出しにでも出たのか。ならば仕方ない―とホームズの部屋に上がる。

　リーはベッドに腰掛けて自分の爪先を凝視していた。スーツは相変わらずおろしたてのように皺がなく、口髭も綺麗に剃られている。憎たらしいことに、靴には汚れすらなかった。しかし、本人は人形のごとく静止し、床の木目と革靴の境を、親の敵のように睨んでいる。

「リー、わたしだ。レストレイドだ」

　肩を揺すって、起こした。

「ああ……警部か……おはよう」

　世界の終わりにでも居合わせたかのような、黙示録的声音だ。

「何をしてたんだね？　靴先にユリイカでも？」

　幾日同じ姿勢でいたのか。身体中を軋ませて起き上がり、リーは大欠伸をかました。そしてはっと何かに気付いた様子で、ホルスターに手を掛けた。

「それより警部……ああ、何といったか、そうだ。夫人だ。ハドスン夫人が読んでしまった」

「読む？　何をだね」

「思い出したんだ。ジャンキーたるもの、おぼえていないときもある……だがね、こればっかりは私の手抜かりだよ……警部、気を付けろ」

「だから、何を読んだのかね。ここの管理人だ。いかがわしい雑誌なら慣れているだろう」

「俺の小説だ。それも、カット・アップされていない純粋なものだ。耐性のない者は、当てられる危険性がある」

　そのときである。下宿のドアが大きな音を立てて開かれた。レストレイドが振り返ると、そこには右手にナイフを手にしたハドスン夫人が立っていた。ふらふらと落ち着きがなく、眼の焦点が合っていない。

「ふ、夫人……な、何を……！」

　夫人は何も言わない。薄っすらと笑みを浮かべて近づいてくる。彼女がナイフを振りかざし、レストレイドは身の危険を感じた。

「し、仕方がない！　失礼！」

　歩を詰める夫人に対し、身構えて蹴りを放つレストレイド。右足が彼女の右手をとらえ、ナイフは回転しながらドアの向こうに落ちていった。驚いた様子の夫人は、何か口ごもったあと、憑き物が落ちたようにへなへなと腰を落とした。何が起きたのか、レストレイドはリーの顔を見る。

「さほど大事には至らなかったようだ……良かった」

「……せ、説明してもらおう。リー！　これはどういうことだ、何をしたんだね！」

「何もしちゃいない。言ったとおりだ。彼女が俺の小説を読んだ……」

　前にも話したろう……とリーは夫人の肩を揺り動かし、頬を二度ほど叩いた。我に返った夫人は、をきょろきょろと動かし、「どうかなさいました？」と訊いてきた。こちらが訊きたいところだ。

「夫人……貴方は意識を失って、まるで夢遊病者のようになって、私たちに襲い掛かってくるところだったんですよ。覚えていませんか？」

　夫人はレストレイドが何を言っているか理解できず、困惑するばかりであった。リーがナイフを拾った。そのナイフを見て、余計に夫人が頭を悩ます。よく砥がれた刃を見ながら、「やはり問題だな」とつぶやく。レストレイドが語気も荒く、詰め寄る。

「何を知っているんだね、リー！」

「簡単な話だ。テクストは遅効性の毒なのだよ、警部……物語に影響されて、人は行動を決定する。特に俺の文章は、人間のデリケートな部分を刺激するものだと、最近やっと気付けたのだ。ヤーへという南米の薬物を用いて書くと、それが促進される。そのためのカット・アップなのだろう。あれは意識が介在していない。自分の文章じゃない……」

　―わかったような、わからないような顔をするレストレイドに、リーは出会ってからもっともはっきりとした声音で告げる。

「そろそろ白黒付けようか。切り裂きジャックの正体を、教えてしんぜよう」

　御者に行き先を告げ、座席に座ると、もうすでにいつものリーに戻っていた。さっきは単に眠気が少しの間晴れていただけなのかもしれない。あの世に片足を突っ込んで生きているような男だ。ゴースト。言い得て妙なニックネームなのかもしれない。

　特に遠慮する必要もない。明朗な返事は期待出来ないが、レストレイドは疑問をぶつける。

「どうしてわかったのかね？」

「どうして……？　いや、思い出しただけさ」

「思い出した？」

「俺は自分の書いた小説も覚えちゃいないからな。見たろう。俺はタイプしたものに順番は付けないし、整理もしない。『裸のランチ』のときは、大体アレンがやってくれた。以前、数頁ほど挟んでまったく同じセンテンスを載せたとき、編集者から痴呆を疑われたよ、あれは参った……」

　確かにホームズも、事件に関係のないことはすっかり忘れてしまうという、不便な―といったらまた反論されるだろうが―体質の持ち主だった。似たようなものか。

「シャーロック・ホームズは慧眼だね……警部、良い友を持った我々に乾杯だ」

「おいおい、まだ何も終わっちゃいないだろう」

「前祝いだよ。酒が欲しい……」

　リーが初めて見せる自信のありげな表情だったので、藁にも縋るというには少し違うが、それでも馬車が到着した場所は、レストレイドを存分に困惑させた。頬を掻いて、するすると門を潜るリーになんて声をかけるか考えているうちに、目的の部屋に着いてしまった。

　ケンブリッジ大学、客員教授控え室。

　フードを目深に被った秘書―客員教授にも付くとは、豪奢なものだ―に手帳を見せて、約束は取り付けていないが突撃させてもらう。秘書は多少物怖じしたようだが、当の本人は授業の合間で在室中らしく、面会は叶った。後ろ手にドアは閉ざされ、レストレイドは身を固くし、リーはいつもの調子で客員教授―コナン・ドイル卿に歩を詰める。

　ドイル卿は流石に連日の訪問に気を悪くしたか、それともの同伴がいけなかったか、あまり好感の持てる態度ではなかった。忙しそうに書籍をめくっていたのを止め、老眼鏡を外してこちらを見据える。幾何反射された埃が、光の道筋を教える。穏やかな昼下がりの、静かな控え室。

　咳払い、ひとつ。

「―ええと、リー氏でしたかな。あれから質問が増えましたか。それとも友人を紹介していただけるのかな？　見ての通り、忙しくてね。個人で雇って、秘書を増やしたほどだ。失礼ながら手短に頼みますよ」

「犯人は貴公だ。ドイル卿」

　リーの言葉に空間が静止する。

　リーはまるでもらいタバコでもせがむような口調で、何となく言い放った。ドイルは生徒に悪い冗談を聞かされた渋い顔で睨み返しているところが、余計現実感を欠如させている。

　レストレイドには、やはり信じられなかった。

「……犯人？」

「切り裂きジャックを止めねばならない」

　リーの顔をまじまじと見つめ、突然噴き出すドイル卿。

「私が、切り裂きジャックだと言いたいのかな？　面白い。実に面白い。なんというか、その、奇抜で……小説的な発想ですな。ベストセラーを狙えますぞ。私が太鼓判を押すんだ。間違いない」

「冗談じゃないさ、卿」

　笑顔をピクリと痙攣させ、鼻息を漏らして渋面を作るドイル。手許の書籍を閉じ、手を組んだ。リーはもう一度繰り返した。

「貴公はジャック・ザ・リッパーだろう」

「ふざけないでもらいたいね」

　レストレイドが口を挟む。

「ああ、失礼。リー、君の推理が正しいか否か、証拠に基づく理路整然とした説明が必要だ。それをらかにしてもらえないか」

「……何だね、君は」

　ドイルの口調が、ぶっきらぼうなものに変わっていく。

「私はジョージ・レストレイド。スコットランド・ヤード所属の警部だ。手帳を見せよう」

「そんなものは見せんでもよろしい。警察か。ではこの不届き者をつまみ出してはくれんかね。大変に気分を害されたのでね」

「貴公の気分はさておき……」

　今度はリーが口を挟む。

「つまみ出される前に喋っておこうか」

　眉間に皺の寄った大学教授が、威嚇するように唸った。

「何を話すことがある。私が娼婦を殺すだって？　貧民街まで降りて？　莫迦も休み休み言え。何の理由がある？」

「理由など犬に食わせましょう。物事が起きたのを示すのに必要なのは、事実だ」

「では、その事実を示しなさい」

「そうか……では、語ろうじゃないか」

　リーは何かを探して部屋を歩き始めた。レストレイドとドイルは彼の姿を眼で追う。あったあったと小躍りして引っ張りだしたのは、椅子だった。不躾ながらもドカリと椅子に腰掛け、胸元から煙草を取り出し、吹かした。何を語るかと思えば、質問が飛び出した。

「貴公の小説は、最近評判がしくないそうだ」

「……連続殺人鬼と私の関係の話ではなかったかな？」

「お答え頂きたい」

「知らんよ。一時の評判に左右されてはいけないからね。どうせ一部のやっかみだろう」

「果たしてそうかな……」

　リーは煙草の灰をどこに落とすか迷っている。仕方なくレストレイドが携帯灰皿を差し出した。礼も言わずそこに灰を落とし、続ける。

「実際に評判は落ちているでしょう、教授。それも仕方ないさ」

「だから、それが何の関係が？」

「あなたが書いていないのだから」

　沈黙―。

　本題には入らず、重鎮を愚弄するピエロはにやにやと笑いながら、煙草を吹かす。怒気も削がれたか、ドイル卿はリーの顔を正面から捉え、一言も喋らない。重苦しい空気が部屋に流れる。リーに主導権を渡しているとはいえ、レストレイドは両者の出方を伺うばかりだった。

「……だ」

「戯言と思いたいだけかな？」

「では、何だ！　気に食わない奴め、お前が書いたとでも言うのか！」

「そうです」

「なっ……」

　立ち上がって指をさすも、気圧されたドイルは勢いをどこにやってよいかわからず、リーも立ち上がって二歩ほどドイルに近づいた。机に手を置き、嗄声のトーンを落として続ける。こいつは何を言っているのか、止めるべきタイミングなどとうに過ぎてしまったのが、レストレイドにはわかった。

「金が無い時期には、よく手伝ったもんだ。あの時は今よりヤクを捌いていたし、吸っていた。両親の羽振りも良かった。だが、何故か金は出るばかりでね。その時についたアダ名がゴースト。急に仕事熱心になった俺を、キャシーなんかが皮肉り出したのが始まりだよ。わかりますかな、ゴースト・ライターをやっていたからだ……」

「……それで？」

「それでも何も。膨大なタイプと執筆中にヤッていたアッパー系のドラッグの譫妄で、ついこの間まで覚えてなかったが、ドイル卿。貴公の六作目だか七作目だかは、ほとんど俺の文章じゃないか。よくそれでふんぞり返っていられるな。正気を疑いますよ」

　リーが勢いよく咳き込み、話が中断される。

「……名前は忘れたが、少し前に、『エドガー・アラン・ポーのような推理小説を書け』と背が高くて妙に青白い肌の男に頼まれたんだ。貴公の前作も一応眼を通したさ。極力文体は似せたつもりだが、俺の影響力は案外大きかったみたいだね」

「ちょっと待つんだ、リー。その影響力ってのは」

　レストレイドの方へ向き直り、リーは胸を張って答える。

「ああ、そうだ。切り裂きジャックたちは、俺の書いたシェリングフォードに当てられて、凶行に及んだのだ。これは凄いぜ。何せ海の向こうの人間に殺人を犯させるなんてのはな」

「お、お……」

　お前が殺ったようなもんじゃないか！

　レストレイドはあまりの驚愕に顎を外しそうになった。

「青白い男は気前が良かったよ、警部。相場の三倍を約束してくれた。保釈中でメキシコに逃げる予定が差し迫っていたから徹夜で打ったんだが、そうか……評判が悪いと聞いて悲しいよ、俺は」

「そういう問題ではなかろう！　リー！」

　レストレイドは、その保釈中やらメキシコへ逃亡やらはどういう意味か、聞きそびれた。

　ドイルが渾身の力で机を叩いたからだ。

　青筋を浮かべて、部屋中に響き渡るような歯ぎしりをしながら顔を上げた。思わずレストレイドはホルスターに手を掛ける。何をしでかすかわからない。

「……リー」

「何でしょう、卿」

「……だ、黙っておけ。いや、黙っておいてくれ。頼む！」

　身を乗り出してリーの両肩を掴み、懇願するドイル。その姿はもはや威厳ある知識人のそれではない。敗者のそれであった。

「あの小説と私の将来は切っても切り離せない関係にある！　確約されているのだ！　学者としての未来も、作家としての未来も、こんなところで捨てるわけにはいかぬ……」

　薄ら笑いを浮かべたリーが、「待て……」と腕を振り払った。

「貴公は知らなかったろう、その波及力を」

　答えに窮し、レストレイドの眼を見るドイル。「正直に」とだけ告げるレストレイド。

「……薄々は気付いていたさ。私は読み終えたとて、発狂はしなかったが。並の作家が書ける代物ではなかった。不安定だった。何から何まで……」

「そう、影響されなかったのですか。感受性が低いな。どちらにせよ、貴公に作家業は向いてないのかもしれませんぞ、教授」

　大家を切って捨てたリーは、役目は終わったとばかりにを返し、ドアに向かった。

「お、おい。リー！　どこに……？」

「どこにって、帰るのさ、警部。動いたら小腹が空いた。何か食べておきたいね、コカも吸いたい」

　何を呑気な―いや、そういう問題ではない。

「この男はどうする！」

「どうするって、どうかするのは警部の仕事だ。俺はホームズの遺言を果たし終えたと思うがね……」

　リーは振り返って、部屋を一望する。ゴミ箱でも覗くかのような、まるで興味を失くした眼差しだ。気力を使い果たしたか、口調も元に戻っている。

「どうせ、ドイル卿からは有力な情報は得られないだろう。現行の法律でどう裁くのかもわからんしね……捕まえるなら俺に代筆を頼んだ青白い男だ。ビートニク文学の特異性に気付いて、文章実験を行わせた張本人なワケだからな……他に何かしでかさないとは限らんよ……」

　リーは部屋を出て行った。あとに残ったのは、彼の吸っていた煙草の煙だけだった。

　レストレイドは彼を追いかけるべきか、ドイルを見張るべきか迷った。何せどちらも重要参考人だ。

　―リーは下宿に戻ると言っていた。であれば、心を折られてれている客員教授の元にいるべきと考えた。今すぐ悪魔の文学をタイプするわけでもなさそうだし、生活している分にはただの無害なジャンキーだ。

　とはいえ、すぐにでも手を回すべき所は沢山ある。出版社と、リーの云う青白い男。多くのシェリングフォード・シリーズを回収することになるが、このふたつを止めれば、新たな切り裂きジャックの抑止になるはずだ。

　嵐が過ぎ去った後の控え室には、外の学生たちの雑踏も僅かしか届かない。

　優しい日差しのなかで、レストレイドはひとつの事件が終わろうとしている感覚を味わっていた。昔、とある探偵と医師とともに幾度となく味わった、忘れがたき感覚であった。

「レストレイド警部、だったか」

　眼を赤く腫らして、わなわなと震えながらも、ドイルはもう一度顔を上げた。ある意味では、彼は被害者なのかもしれない。膨大な数の模倣者を生み出してしまった。彼もまた、知らぬうちに舞台へあげられた演者のひとりだ。

「間違っていたかな、私は」

「いえ」

　大した慰めの言葉ではないし、レストレイドは今に至っても彼の作品は未読であったが、

「リーの原稿でない、初期の貴公の小説を楽しんだものもいますでしょう。気を落とさないでいただきたい」

　とだけ口にした。

「そうか」

　シェリングフォードが、死んだ瞬間であった。

　だが、しかし。

「名探偵は名探偵を産み出します。貴公の名は語り継がれるでしょう。これからの処遇がどうなるかは判りかねますが、ロンドンの闇は払われた。貴公にも胸を張ってもらいたい」

「……そうさせてもらおう」

　ふたりは笑みを浮かべた。次第にそれは快笑に変わっていった。胸がすくような、晴れやかな快笑だった。控え室に轟くふたりの笑い声はいつまでも続いた。

「ドイル卿……」

　ひとしきり笑った後、レストレイドが目尻を指で拭いながら、彼に握手を求めた瞬間。

　―銃声。

　レストレイドは飛び退いて、身を屈めた。ホルスターからピストルを抜き、物陰から銃声のした方の様子を伺う。窓からだ。銃痕がガラスを穿っている。その向こうにピントを合わせ、走り去る男の後ろ姿を目に焼き付けた。見たことがある。それもごく最近だ。

「……秘書か！」

　男を追いかけようにも、すでに見失ってしまった。応援を頼むか。銃痕や目撃証言を洗えば犯人は捕まる。それよりも先ず。

「ドイル卿！　しっかりしてください！」

　凶弾はドイル卿の胸を貫いていた。口腔から血を吐き、苦悶の表情を浮かべるドイル。椅子からも崩折れ、手は空を切る。駆け寄ったレストレイドの手に、べっとりと血糊が付いた。

「だ、誰か来てくれ！　誰か！」

　レストレイドはドアを蹴り開け、救援を呼びに行った。

　流行作家の急死がタブロイド紙で報じられたのは、それから三日してのことだっった。

　新聞を放り投げ、レストレイドは自分の不甲斐なさに椅子をかかとで蹴った。紅茶が揺れて、テーブルに溢れる。拭き取りながらも、やはり彼は自分を責めた。

　警察が身近にいながら、白昼堂々の大学構内で、人一人むざむざ死なせてしまうとは。脳裏には辞職すらちらついたが、切り裂きジャック事件はまだ終わっていないと自らに言い聞かせた。思いとどまった彼はこの数日、歩きに歩いた。

　出版社に出向き、差し止めを願い出て、原本も提出するよう求めた。渋る担当者に、職権乱用のごとく「公務妨害だ」と怒鳴り無理矢理保管室まで案内させると、シェリングフォード・シリーズの原稿だけが消えていた。掲載していた雑誌社でも同じだった。盗まれたのだ。肩を落とすレストレイドと、半狂乱になって探し出す編集者たち。

　リーとはその後会っていない。あの後ベイカーには寄ったらしいが、夫人への挨拶もそこそこにに帰ったようだ。どこにそんな金が……と思ったレストレイドが、あとになって下宿を調べてみると、高価な古書が粗方失くなっていた。家に帰る金がなくて、他人の古書を売り飛ばす作家など聴いたこともない。

　はたしてどこに行ったのかもわからないし、リーを捕まえることは不可能に思えてきた。令状も何を理由にして出せばいいか、見当もつかない。原因を野放しにしているような気もするが、本人は自身の危険性をわかっているようだし、カット・アップだの何だのと言って対抗手段を探すことに執心していたから、通り雨と思って諦める他なかった。それに、あの奇人と渡り合うだけの体力が、レストレイドにはもう残っていなかった。

　不適切な表現があったという触れ込みで、ウェストやマクドナルド警部補を半ば騙して手伝わせ、新書店や古本屋をまわり、多くのシェリングフォード・シリーズを回収出来た。だが、一度出回った書籍をもう一度集めるにも限界はある。まさか一軒一軒虱潰しというわけにもいくまい。

　心理学や犯罪学、はたまた文学の博士まで、レストレイドは自らを納得させるために時間を作って話を聞きに行った。あまり仔細を語れない事情もあって、オカルトならよそへ行けと門前払いを食らったりもしたが、興味深く聞きいってくれる教授もいた。彼らは、「このロンドンの閉鎖的な状況が遠因とも考えられる」とマイクロフトと似たようなことを言っていた。「産業革命以降、モネも描いたようなスモッグと霧の空が、人々に暗い陰を落としている。犯罪に焦がれる姿勢もわからないではない」とか。警察の身には辛い話だ。

　の悪いレストレイドには難しい話だったが、ひとまずは納得した。あれから目立った事件も起きてはいない。気がかりは残っているが、精も根も尽き果てた。久しぶりの休暇で、身体を休めようとしたのも束の間、夫人に茶会へ誘われていたのを思い出した。

　どうせ自室に籠もって新聞を読んでいても自己嫌悪に陥るばかりである。夫人には迷惑をかけ通しだ。出向いてみてもバチは当たらないだろう。

　レストレイドは馬車に乗り込んだ。

　ハドスン夫人がホームズの部屋でお茶を淹れて待っていた。あまり片付いていないようだったが、これはこれで思い出が積もっているようで悪くない。

「うむ、良い香りですな」

「いらっしゃいませ、レストレイド警部。どうぞ、お掛けになって」

「やや、失礼します」

　コートを脱ぎ、腰を落ち着かせた。あれやこれやと話を重ねながら、カップを手に取る。彼女の淹れるレッド・ブッシュ・ティーは旨い。優しさが感じられるのだ。

　柔らかな午後だった。雲間から日差しが差し込み、ロンドンの市民を祝福していた。バッハの旋律を耳にしているかのようだ。

　あれからも小さな事件は絶えないが、自分は正義の陽のもとに、この大英帝国の繁栄と安寧のため、身を粉にして働き―いつか必ず悪の根を絶やそう。そう誓ったレストレイドであった。

「ときに警部、本日はもう一人、お客様をお呼びしているの」

「ほう？　驚かせようといったって、リーは願い下げですからな。彼とは競馬場でも出会いたくないものですから」

「あらあら、酷い嫌われようですね。お似合いのコンビでしたのに。いえいえ、奇人ではございませんわ。安心して……いや、奇人には変わりないかしら」

「何ですと？」

「誰が奇人だって―？」

　その瞬間、夫人の背後のソファーが盛り上がって、動き出した。いや、違う。模様だ。模様がソファーから抜けだして、テーブルの方に近付いてきたのだ。眼の錯覚かと両眼を擦ったが、模様は未だに動いていた。模様はテーブルに手を付き、バケットをひとつ手に取った。そして、被っているマスクを剥ぎ取り、バケットを齧った。

　彫りが深く、無精髭を生やした、懐かしい顔が現れた。

「ホームズ！」

「この程度の変装も見破れないのかい、レストレイド警部。君が夫人と仲睦まじく喋っていた最中、僕は少なくとも五回は姿勢を変えたぞ。このソファー模様のシャツ、見た目通り着心地が悪いもんでね……使い勝手は良いんだが」

　シャーロック・ホームズは、夫人の隣に椅子を用意して、深々と腰掛けた。どこからか取り出したパイプを口の端にくわえ、火を点ける。さも不味そうに煙を吐き出して、でも直ぐ様二口目を味わう。そのすべてが、まごうことなきホームズ本人の挙動だった。

「しかし、夫人も人が悪いな。確かに、どうせなら茶会でも開いて警部を驚かしてやろう、と企てたのは僕だが、まさか本当に茶会の当日まで僕の生還を告げないとはね。余程この鉄面皮の素っ頓狂な声が聞きたかったものと見える」

　この悪い口も彼そのものである。

「ああ、ホームズ……君に会えて嬉しい……だが、君は死んだはずではなかったかな？　いつ帰ってきたんだね？」

　へへん、とホームズは得意げに笑う。

「帰ってきたのは、昨夜だ。どこからと云われれば、それは地獄の一番地から……と言いたいが、そうではない。ライヘンバッハに落ちただろう。あのとき僕は身体をしたたかに打ち、生死のあわいを彷徨ったが、何とか生き延びた。近くの土地で数週間養生した後、世界中を駆け巡っていたのさ。ある人物を追ってね、君たちにそいつの魔の手が及ばないよう、配慮したつもりだったんだが、心配をかけてすまない。しかし、まさか葬儀まで済んでいるとは……」

「ある人物とは？」

「その質問の答えだけで、いくつかの質問にも対応できる。コナン・ドイル卿の胸を撃った犯人、原稿の盗人、そもそもリー・バロウズにゴースト・ライターを頼んだ青白い男、僕が血眼になって探している犯罪界のナポレオン―モリアーティ教授だ」

「まさか！　生きていたのか！」

「彼もまたライヘンバッハで生き延びていたのだ。もしくは僕が戦った男は影武者だった可能性もある。彼は人を使うのが上手いからな。秘書を潜り込ませるのも、編集者に指示を出すのも、彼にとっては朝飯前だ。実際、今回の事件は、人はどこまで使えるかという、その極地の事件だったわけだしね。モリアーティ教授にしてみれば、イーストエンドなど、実験場か屠殺場のようなものなのだろう」

　ホームズはそういって、模様シャツのまま立ち上がる。

「どこへ行くんだ？」

「モリアーティ教授を探さねばならない。彼を野放しにするのは、これから起きる犯罪を見て見ぬ振りをすることに等しい。ああ、その前に―銃痕と指紋が残っているだろう。それをヤードに借りに行くがね。一緒に来てくれるかな、警部」

　ホームズは手を差し出した。

　レストレイドは迷わず、その手を握った。今はもう、懐かしさなど感じない。正義だ。この暗雲を掻き分け、ロンドンに光明をもたらす、稀代の名探偵の正義に触れているのだ。

　ならばもう悲しむことはない。前へ進むだけだ。

　柔らかな午後にふたりの男が手を組んだ。何人たりとも我々に敵うことは有り得ないと、レストレイドは強く確信した。またあの頃の、胸躍るような冒険が待っているのだ。

「勿論だ、頼むぞ、ホームズ」

レストレイドの決意を受け取ったホームズは、大きく頷き、模様シャツをその場で着替え始めた。

　夫人が、「信じられない」と眼を逸らした。

<了>